

# コスモロジーの構造及び母の愛

—芥川竜之介『杜子春』—

鄭寅汝\*

chonginmun@hanmail.net

## Contents

- I. はじめに
- II. コスモロジー(異界)の構造
- III. 母の愛
- IV. むすびに

## Abstract

本稿はコスモロジー(異界)の構造と杜子春の人間愛を通した<母の愛>について追究してみた。まとめてみると、以下のようである。

一つ目は、そのコスモロジーは仙界と地獄(六道世界)から成ることであった。杜子春の魂は天上に上昇するのではなく地獄に下降し、まず手始めに肉体的な呵責を受ける。そこでの厳しい苦行がいわゆる冥界訪問の話型と結びついて、いつのまにか地獄での苦行へと移行し、そこで畜生道へ堕ちていた父母を幻視するというものであった。

二つ目は、杜子春の人間愛を通した<母の愛>についてさぐってみた。その一、母親の杜子春への愛は無償の愛であった。その根底に芥川の母親不在のコンプレックスを想定することができた。その二、非人間化の道を歩もうとしていた杜子春の回心のきっかけを与えたのが<母の愛>だった。その三、仙人の矛盾する言葉からくる杜子春のアポリアは、黙っていなければ仙人の術は得られず、黙っていれば殺されるということになる。そこには看過しえない二つの問題がひそんでいた。その一つは、仙人の矛盾する言葉である。もう一つの問題は心根の優しい母親がどうして地獄の畜生道に堕ちたりしなければならぬのかということであった。

**Key Words** : <知>の解放、コスモロジーの構造、母の愛、地獄の畜生道  
(Liberation of knowledge, Course diagonally lichen structure,  
Love of mother, Axial student of hell)

\* 前東亜大学校日語日文学科教授、日本近代文学専攻。

## I. はじめに

『杜子春』<sup>1)</sup>は1920年7月『赤い鳥』第5巻第1号に発表された。後に短編集『夜來の花』(改造社、1920.8)には童話として『魔術』『蜘蛛の糸』とともに収録された。材源について芥川は「拙作『杜子春』は唐の伝奇小説『杜子春伝』の主人公を用ひをり候へども、話は三分の二以上創作に有之候」<sup>2)</sup>と言及している。ちなみに、『杜子春伝』は唐の李復言(775~833)の書いた神仙小説で、明清の叢書などの中には時に唐の鄭還古撰という説もある。芥川の説明にもかかわらず、物語のかなりの部分を原典『杜子春伝』にたよっているが、それに題材を求め、それを巧みに再話したものだ。『杜子春伝』のほかに、たとえば川島絹江は『大唐西域記』を新たに付け加えている。<sup>3)</sup>さらにいえば、地獄の様相については芥川旧蔵の『絵本西遊記』にたよっているとされる。「子供の時の愛読書は『西遊記』が第一である」<sup>4)</sup>と言っていた芥川にとっては『西遊記』からの影響も大きいにちがいない。また父母が畜生道に落ちて瘦馬になっているところは『今昔物語集』巻19第3話「内記慶滋母胤出家物語」が典拠として指摘されている。<sup>5)</sup>

先行研究は、古くは正宗白鳥が『芥川氏の文章を評す』で、「『蜘蛛の糸』などの童話の世界は、ストーブで温められた温室的書齋での仮寝の夢に過ぎない」としたうえで、『杜子春』についても「有り振れた人情に雷同して作為された物語」<sup>6)</sup>と断じているのが現在でも知られている。本格的な研究では直観的評論ではなく、原典との比較、童話の作品群との内的関連、修辞の問題などを中心に綿密に展開されてきた。たとえば三好行雄は「杜子春が最後に手に入れた幸福は老いた素戔嗚の安住した炉辺の幸福に通じる」<sup>7)</sup>と論じた。仙人に脱化するために、自身を非人間的試練に追い込んだ杜子春の人間性回復の過程には芥川一流の肉親愛が持ち込まれており、その愛は肯定されているが、ただ人間性の全的肯定だとは言

1) 本稿で用いた『杜子春』(1996)のテキストは、筑摩書房版の『芥川竜之介全集』所収による。

2) 河西信三宛書簡、1927年2月3日付。(『文章倶楽部』(1920)、p.23.)

3) 川島絹江(1964)『大学古典叢書四』勉誠出版、p.96

4) 芥川竜之介(1920)『愛読書の印象』『文章倶楽部』、p.54.

5) 高橋竜夫(1979)『『杜子春』論』『稿本近代文学』、p.121.

6) 正宗白鳥(1925)『芥川氏の文章を評す』『中央公論』、p.56.

7) 三好行雄(1978)『杜子春・南京の基督』解説、角川書店、p.86.

い難い。尾崎瑞恵はこの作品に言及したうえで「作家としての芥川も、児童物に対してだけは本来の芥川になれた」<sup>8)</sup>という〈本音〉説を主張しているが、それに対して宮城達郎は「作者の精神に纏綿するあらゆる複雑な陰翳は拭い去られ」、「子供に与えて差支えない健全な部分だけが示されている」<sup>9)</sup>という〈作為〉説を強調する方向もあって、決着を見ていない。

芥川における母不在の問題については三好行雄も注目していたが、それを受けて平岡敏夫は、杜子春を呼ぶ声が芥川の「母を呼ぶ真実の声」、そして「聖母マリアを呼ぶ『西方の人』の声につながっていく」<sup>10)</sup>と論じた。その認識は芥川の母が次第に無限抱擁の母性の慈愛へと向かっていったというこの平岡説は現在でも注目されてよい。つまり、このストーリーの表層において誰もが容易に読み取ることのできる、酷薄な世間の人々と対照される親の愛の真実、平凡な生活の中の本当の幸福といった倫理的、道徳的モチーフをどのように評価するかがこれまでの『杜子春』研究の主軸となってきたといってもよからう。

この童話で芥川は自己の抑制された〈知〉の何を解放しようとしている。そこには童話の世界を現実から完全に切り離そうとする意識、それに宗教的世界への心情的共感を背景にして、現実に抑圧される〈知〉を解放しようとしたという芥川に共通する心性を見ることができる。本稿はコスモロジー(異界)の構造と杜子春の人間愛を通してみた〈母の愛〉について検討してみようと思う。

## Ⅱ. コスモロジー(異界)の構造

『杜子春』はすでに言及したように、原典である唐代伝奇の『杜子春伝』をプレテキストとして、そのプロット構成を骨子とする。その意味で御伽噺的ではあるのだが、いわば典拠を脱構築するかたちで書かれているところに芥川の中国古典物の特徴がある。

8) 尾崎瑞恵(1968)『芥川竜之介の童話』『文学』第38巻6号、p.94.

9) 宮城達郎(1974)『『杜子春』考』『解釈』第20巻8号、p.138.

10) 平岡敏夫(1982)『『杜子春』—母を呼ぶ声』『芥川竜之介—抒情の美学』大修館書店、p.328.

いま梗概を記すに当って<三>の二倍の六節に分けて述べてみよう。

「一」春の夕暮れ、落胆した杜子春が洛陽の西門の下で、一人の老人に出会う。

「二」老人から金を恵まれた杜子春はすぐに使い果たし、再び洛陽の西門の下に来て老人から金を恵まれる。

「三」再び零落した杜子春は人情のはかなさを知り、仙人になろうと決心する。

「四」仙人になるために老人(その名を鉄冠子という)に連れられて峨眉山に入り、母の幻を見せられ、またその声を聞かされるが、老人の言葉に従って声を出さずにいる中に気絶してしまう。

「五」地獄に堕ちた杜子春の魂は母が苦しめられるのを見かねて声を発してしまう。

「六」杜子春は仙人になることも、大金持になることもあきらめて、人間らしい正直な暮らしをしようと考え直し、鉄冠子から泰山の南麓に一軒の家をもらう。

このうち「四」と「五」は杜子春の受けた難行苦行の数々が語られ、この作品のクライマックスを構成している。「四」は峨眉山における修行である。「たとひどんなことが起らうとも、決して声を出すのではないぞ。もし一言でも口を利いたら、お前は到底仙人にはなれないものだ」と覚悟しろ」という老人の戒めを胸に、虎と蛇の来襲を退け、雷雨にもめげず、神将の戟先にも屈しなかった。「五」は地獄における難行で、閻魔大王に威され地獄でのさまざまな責め苦を味わわれる。それらにも平然として口を割らなかったが、最後になって畜生道に堕ちた父親が眼前で責めさいなまれ、母の顔をしたその馬が「心配をおしでない。私たちはどうなつても、お前さへ仕合せになれるのなら」と言うに及んで、耐えきれずに「お母さん」と叫んでしまう。

この童話が何を語ろうとしているのかを追究するまえに、芥川童話の特徴ともいえるコスモロジーの問題に言及してみる。作者芥川はその童話の世界を現実世界のリアリティと断絶させるために、まったく自己完結した異界を形成する。それが『蜘蛛の糸』では極楽と地獄が上下に接続するファンタスティックな異界構造だった。それを物語の世界として芥川は現実のリアリティに捉われざるをえない<知>を思いのままに解放したとみてもよかろう。作者芥川にとって童話は、<知>を解放することによる<知>の遊びそのものだった。

したがってこの『杜子春』にとっても異界というコスモロジー形成が真先に優先されたのではなかろうか。この作品でのコスモロジーは仙界と地獄(六道世界)にあるが、ストーリーから説明すると、杜子春は仙人によって仙界に導かれていく。仙人になるために杜子春が連れていかれたその試練の場が峨眉山である。その次が峨眉山で試された試練に彼が耐え、口をきかなかつたために神將に三叉の戟で突き殺されて落ちて行った先が地獄である。「杜子春の魂は、静に体から抜け出して、地獄の底へ下りて行きました」。魂は天上に上昇するのではなく地獄に下降し、そこにおいてもまず手始めに肉体的な呵責を受ける。そこでの厳しい苦行がいわゆる冥界訪問の話型と結びついて、いつのまにか地獄での苦行へと移行し、そこで畜生道へ堕ちていた父母を幻視するというものである。

実はこのように説明してくると、そこに、一、主人公が聖なる異人によって異界へと導かれる。二、異界において厳しい苦行につとめる。三、(仮死状態に陥る)。四、冥界における苦行で試練を受ける。五、地獄(畜生道)に堕ちた父母を幻視する、という要素から成り立っていることがわかる。このうち「四」と「五」については、それらが古典の説話に見える冥界訪問譚の話型に従っていることがわかる。この要素に照応する説話として著名なのが『道賢冥途記』<sup>11)</sup>を原型とする日蔵六道廻り譚で、その絵巻は『天神縁起絵巻』<sup>12)</sup>にその絵画と詞章が収められている。

それによると、道賢は吉野金峯山に登山し、笹の窟で厳しい苦行に入る。何日にも渡る苦行に心身は衰弱の極限に達し、そのまま意識を失ってしまう。これが『杜子春』の「二」→「三」の苦行から「四」(仮死状態)へと照応する。すると、そこへ不動明王が現れ、道賢の口に甘露を含ませ蘇生させようとする。やがて息を吹き返した道賢を不動明王がともなって六道巡りへと連れて行く。これが「一」→「五」の要素と照応するとみてよかろう。ただし「五」では父母を幻視するのではなく、地獄に堕ちて火刑の苦を受けている醍醐天皇を幻視するという内容である。

『道賢冥途記』がいかなる目的をもっているかはさしおいて、問題は芥川の『杜子春』が唐代伝奇に材源を求めながら「三分の二以上創作」<sup>13)</sup>といっているそのス

11) 道賢(1973)『北野社誌』角川文庫、p.198.

12) 道賢(1973)『日本絵巻物集成』角川文庫、p.87.

トリー内容が説話文学における異界訪問譚の話型を、おそらく芥川にとっては無意識的ながら、自己の童話の枠組としているということである。そこには童話の世界を現実から完全に切り離そうとする意識、それに宗教的世界への心情的共感を背景にして、やはり『蜘蛛の糸』と同じように、現実に抑圧される〈知〉を解放しようとしたという芥川に共通する心性を見ることができる。

### Ⅲ. 母の愛

#### 3.1 自己犠牲の母へ向かう愛—實母への渴望

この童話で芥川は自己の抑制された〈知〉の何を解放しようとしているのかをさぐってみよう。その点でまず注目されるのが杜子春が地獄で鞭打たれる父母の姿に接する場面で、次のように述懐するところがある。

母親はこんな苦しみの中にも、息子の心を思ひやつて、鬼どもの鞭に打たれたことを、怨む気色さへも見せないのです。大金持になれば御世辞を言ひ、貧乏人になれば口も利かない世間の人たちに比べると、何といふ有難い志でせう。

それは地獄で責め抜かれる母親の杜子春への無償の愛であり、その母の愛ゆえに発してしまった杜子春の「お母さん」という一声である。これはこの作品に通底する重要な主題にかかわると思われる。この童話でのそれはきわめて凝縮された、しかも教訓的な表現で捉えられている。このプロットについては勝倉寿一が「年少者に与える感銘の核」は「母の声への杜子春の感応、すべての利害・打算を振り捨てた無償の愛への魂の交感にあった」<sup>14)</sup>と述べている。また平岡敏夫も同様の箇所を中心に、概念化された言葉では汲みつくせない表情などに湛えている深く切実なものに着目しつつ芥川の表現の力を強調し、そこに芥川の秘められた「母を呼ぶ真実の声」<sup>15)</sup>を見いだしている。その主題批評の根底に母親不在

13) 河西信三宛書簡、1927年2月3日付。(『文章倶楽部』(1930)、p.23.)

14) 勝倉寿一(1983)『杜子春の背景』『文芸春秋』、p.163.

のコンプレックスを想定することは共通している。

原作は子への愛という欲情を否定する道教的な禁欲の戒めに創作意図を置いている。原作においては意味不明な「噫噫」に対して、芥川の杜子春は畜生道に落ち、馬の形にされて鞭の苦しみを受けながら、なおわが子の幸福だけを思っている母を見るに耐えられず、「お母さん」と一声叫ぶ。芥川は杜子春が「お母さん」と叫ばざるをえなかったところに母子の愛の美しさと尊さを強調したとみてよかろう。母が子へ向かう愛の原作をうちかえして、芥川がわざわざ子が自己犠牲の母へ向かう愛を設定するのは発狂の実母に対する深い渴望が潜在しているためと思われる。

周知の如く、芥川は狂人の母を持ち、生後まもなく母方の親類である芥川家に養子として迎えられ、その姓を継いだ人である。幼年時の彼は養父母に馴染まず、むしろ同居していた伯母ふきの手によって育てられたようだ。こうした点についてはすでに村松定孝に若干の言及があるが<sup>16)</sup>、杜子春の母親像の中には、狂気ゆえに失った母のイメージが托されているのではないかと、考えるものである。

### 3.2 非人間化の道から人間性回復へ—母の愛

では、なぜ杜子春は仙人になろうと志したのであろうか。そのあたりの事情を確認しておきたい。杜子春は二度ならず三度までも財産を使い果たし、行きくれて洛陽の西の門の下に立ったのだが、仙人鉄冠子からまたしても黄金を提供されようとした時、その申し出を遮って次のように語っている。

「いや、お金はもう入らないのです。」

「金はもう入らない？ ははあ、では贅沢するにはとうとう飽きてしまったと見えるな。」

老人は審しさうな眼つきをしながら、ちつと杜子春の顔を見つめました。

「何、贅沢に飽きたのぢやありません。人間といふものに愛想がつきたのです。」

15) 平岡敏夫(1982)『芥川竜之介 抒情の美学』大修館書店、p.196.

16) 村松定孝(1971)『芥川竜之介の童話—『杜子春』をめぐって—』『解釈』、pp.84-96.

杜子春は不平さうな顔をしながら、突慳貪にかう言ひました。

「それは面白いな。どうして又人間に愛想が尽きたのだ?」

「人間は皆薄情です。私が大金持になつた時には、世辞も追従もしますが、一旦貧乏になつて御覧なさい。柔しい顔さへもして見せはしません。そんなことを考へると、たとひもう一度大金持になつた所が、何にもならないやうな気がするのです。」

仙界には富が集中していることがうかがえよう。富のもたらす物欲が人間の心を大きく変えるという資本主義が成熟してきた芥川の時代が背景にあらうか。あくまでも童話である以上、人間の普遍的な欲望表現なのであらう。杜子春は極端に贅を尽くして没落を繰り返したからこそ、人間の欲望に支えられた金銭による人間関係の脆弱さや空虚さをはじめて実感したのである。

そしてその結論として、杜子春は鉄冠子に弟子入りして仙人になろうと志すのである。しかし杜子春は仙人になろうと思ふ反面、まだこの段階では本当には現世の欲望を思い切つてはいない。たとえば、その言葉の少し前ではこう言っていた。

「何、贅沢に飽きたのぢやありません。人間といふものに愛想がつきたのです。」

杜子春は不平さうな顔をしながら、突慳貪にかう言ひました。

「それは面白いな。どうして又人間に愛想が尽きたのだ?」

「人間は皆薄情です。私が大金持になつた時には、世辞も追従もしますが、一旦貧乏になつて御覧なさい。柔しい顔さへもして見せはしません。そんなことを考へると、たとひもう一度大金持になつた所が、何にもならないやうな気がするのです。」

杜子春の二度にわたる遊蕩は、もちろんそれ自体道徳的に批判されるべきものであらうが、なかなか育つた環境に培われた価値観や思考様式を自ら転換させることは難しい。贅を尽して貧乏になつた杜子春に対して「さうすると人間は薄情なもので、昨日までは毎日来た友だちも、今日は門の前を通つてさへ、挨拶一つして行きません。」と、語り手は杜子春の心境を代弁するように語る。元金持ちの息子として育つた杜子春の価値観が転換しないかぎり、彼にとって金銭を軸にしてしか人間関係を計ることはできないのである。



ここで杜子春がいう『人間といふもの』のなかにはおそらく彼自身は含まれていないと言えよう。『人間といふもの』という突き離れた言い方には自身が見つめる『人間』とは距離を置いているところに杜子春はいるからである。したがって彼の認識は杜子春から他者に向けられているのだが、その論理の拠点である自分に対しては何ら疑義を差しはさんではない。たとえば、もしその論理の拠点を他者に置いてみれば、『人間といふもの』のなかに<他者の他者>である自分も含まれるはずなのに、杜子春はそのことを認識していない。だから、杜子春には真の意味の他者が認識されていないということであろう。いうなれば、杜子春の論理は一方的的なものであり、双方向的に、言い換えれば相互媒介的に真に達観されたものではない。そのような意味では、自分だけには愛想がつきずに贅沢に飽きないことは充分にできるのである。だから、真の他者を認識しない杜子春からする仙人との会話あるいは応答には本当の対話が成立することはない。

ところが次のような杜子春と仙人鉄冠子のやりとりがある。

「なれません。なれませんが、しかし私はなれなかつたことも、反つて嬉しい気がするのです。」

杜子春はまだ眼に涙を浮べた儘、思はず老人の手を握りました。

「いくら仙人になれた所が、私はあの地獄の森羅殿の前に、鞭を受けてゐる父母を見ては、黙つてゐる訳には行きません。」

杜子春はあれほどなりたかった仙人になれなかったことを喜ぶ。それは仙人になって人間世界と位相の異なるところで生きたいと思う自らの願いと、母に声をかけたいと思う自らの欲望との葛藤において母との交感を選んだことからわかるように、まったくの他者との関係から決めた生を生きることよりも、肉親との交感を保持しながら生きることを選ぼうとした。もし杜子春が仙人の戒めを破ることなく苦行を成功させていたなら、不老長寿とあらゆる富、それに人間の本能としての快樂を尽すことのできる仙界へと入る資格(乗仙)を手にしたことであろう。しかし杜子春はその非人間化への欲望をすべて捨てて母の愛に應える。

言い換えれば、非人間化の道を歩もうとしていた杜子春の人間性回復への、

いわば回心のきっかけを与えたのが<母の愛>だったのである。とすれば、ここでの<母の愛>は宗教的回心にも匹敵する。この杜子春の生き方、考え方が童話としての機能に戻せば、子供への教訓ということになる。体験と反省、労働の拒否と厭世観、一人よがりの考え方と他人を思いやる心、これらの人間にとっての条件において杜子春は反面教師だったのである。より良い人間とは、それがこの童話の教訓だった。そしてそれを素朴な表現に託した芥川龍之介その人の人間の条件だったということもできよう。

### 3.3 杜子春の陥ったアポリアー二つ目の問題

それゆえにこの童話にとって欠かすわけにはいかない、意外などんでん返しがあつた。最後の「六」において、慈母の痛ましい境遇に思わず声を発し仙人になりそこなつた杜子春に対し、鉄冠子は次のように語つて聞かせる場面がある。

「もしお前が黙つてゐたら—」と鉄冠子は急に厳な顔になつて、ぢつと杜子春を見つめました。

「もしお前が黙つてゐたら、おれは即座にお前の命を絶つてしまはうと思つてゐただの。—」

しかし、すでに修行に入つてゐた杜子春は仙人の命令に従つて沈黙を続けてきたわけである。最初の鉄冠子の命令とは次のようなものであつた。

「おれはこれから天上へ行つて、西王母に御眼にかかつて来るから、お前はの間ここに坐つて、おれの帰るのを待つてゐるが好い。多分おれがゐなくなると、いろいろな魔性が現れて、お前をたぶらかさうとするだらうが、たとひどんなことが起らうとも、決して声を出すのではないぞ。もし一言でも口を利いたら、お前は到底仙人にはなれないものだどと覚悟をしろ。好いか。天地が裂けても、黙つてゐるのだぞ。」と言ひました。

このように、「たとひどんなことが起らうとも、決して声を出すのではないぞ。」

』という命令と、前述の「もしお前が黙つてゐたら、おれは即座にお前の命を絶つてしまはうと思つてゐたのだ。」という言葉とは、同じ仙人の言葉としては当然矛盾をきたすはずである。杜子春にしてみれば、黙っていなければ仙人の術は得られず、黙っていれば殺されるということになり、これは言ってみれば、最初からアポリアに陥されていたというべきかもしれない。

後者の仙人の言葉には二つの命令が含まれている。それは「おれの帰るのを待つてゐる」こと、それに「決して声を出すのではないぞ。」である。この二種類の命令を守ることが杜子春が仙人になるための前提であつた。ただし、ここでもう一つ厳密に見ておかねばならないのは、仙人のほうはこの二つの命令を守り抜けばそれでただちに仙人になれるとは言っていないということである。仙人はあくまで「一言でも口を利いたら、お前は到底仙人にはなれないものだ」と覚悟をしろ。」といっているのであり、その「到底」には裏を返せばそれくらいのことのできなければ、仙人の修行の入口にすら入ることができないのだということが含意されていそうである。どうやら、一言でも口を利かずにいたら、そのまま仙人になれると思つたのは、杜子春の勝手な思い込みであつたという気味が濃いようである。

ところが、杜子春がそのまま声を出さなかったら、仙人は即座に彼の命を絶とうとした。それは直接的には杜子春がもし父母の苦しみを黙過したらその報いとしてということであつた。杜子春へのアポリアはどうして用意されねばならなかつたのだろうか。仙人になりたい杜子春なのに、どうして課された戒めを破らなければ殺すと、最後になって仙人はおごそかに言つたのだろうか。

杜子春が仙人の戒めも忘れて、「『お母さん』と一声叫びました。」のが倫理的に見て正しい行為であつたとすれば、仙人は杜子春の心を賞め、それゆえにこそ仙人の術を教えてやるのが本当だと考えるのが当然であろう。しかしこの童話の筋立はそうはならず、意想外の結末を用意して読者を驚かせる。そこには看過しえない二つの問題がひそんでいるのだが、そんなことよりも、読者はその結末に感動する。したがって本稿が二つの問題にこだわるならば、あるいは童話の感動を無視することになるかもしれない。

それでもあえて二つの問題を考えることにしよう。その一つは、これまで見てきた仙人の矛盾する言葉であり、それによって杜子春が陥つたアポリアである。

いま一つの問題は心根の優しい母親がどうして地獄の畜生道に墮ちたりしなければならないのかということである。これらは実は連動している。

### 3.4 母親の畜生道

説明の便宜のために後者から見ていこう。問題は畜生道である。たしかに畜生道は餓鬼道・地獄とともに三悪道と呼ばれて地獄に一括されるのが通仏教的理解だが、たとえば江戸時代には『血盆経』という教典が通行し、そこでは女人は<血の池>地獄に墮ちるとされて怖れられている。<sup>17)</sup>ただしそこは六道の最下層の地獄であって畜生道ではない。また中世説話の冥界訪問譚でも醍醐天皇は墮獄して火刑の苦を受けているとされている。

そこには複数の理由が想定されるのかもしれない。まずたとえば、この作品がもともと童話として執筆されたものであるから、あまりにむごい地獄描写は避けたいということが考えられる。それにまた死後の異界を仏教的転生という考え方で理解させるほうが子供にはよくわかるのではないかと考えて、現世の人間の姿のまま地獄の苦を受けるというのでは異界のイメージはよく伝わらないとすれば、人間の姿が別の動物に生まれ変わるとしたほうがヴィジュアル的に異界のイメージが伝えられると判断したのかもしれない。

しかし芥川が中世的な物語世界へのあこがれが強かったことをふまえるとき、中世的仏教における亡者観をたどっておくことも無益ではなからう。たとえば父親が畜生道に墮ちるとする場合、それは生前の現世において動物を虐待するか、屠殺するかした報いとされる。この作品では背後に点景としてしか描かれていない父親だが、おそらく杜子春の父親は農民として牛馬を農耕に利用していたか、牛馬あるいは豚や鶏の肉を食べたことの報いということが想定される。それに対して母親はそういう報いとしてというよりも、中世仏教の女人観によるというべきだろう。『法華経』提婆達多品に龍女成仏という説相がある。この説相を経証として龍女から貪瞋痴の『三毒極成体』という女人観を導き出している。<sup>18)</sup>この女人観では

17) 吉岡義豊(1989)『中国民間の地獄十王信仰について—玉歴至宝鈔を中心として—』『吉岡義豊著作集』第一巻、五月書房、p.186.

18) 貪瞋痴(1978)『溪嵐拾葉集』天台宗法華経、p.298.

龍女は畜生とされるところから、女人は死後畜生道に墮ちると観念された。<sup>19)</sup>芥川の『杜子春』からそこまで読むことなどとうていできない。しかし芥川が中世の文学を愛していたことは彼の創作からうかがえるとすれば、そこから中世的な女人観が畜生道と結びついていることは教養としてあったということも否定できない。

では、なぜ女人と畜生が結びつくのか。そこに女人観の食欲を代入するとわかりやすい。食欲とは近代語でいえば、まさにエゴイズムである。杜子春に語りかけた母の言葉を見てみよう。

「心配をおしでない。私たちはどうなつても、お前さへ仕合せになれるのなら、それより結構なことはないのだからね。大王が何と仰つても、言ひたくないことは黙つて御出で。」それは確に懐しい、母親の声に違ひありません。

これは子供に対する自己犠牲の母性愛とってよかろう。この母性愛が第三者に対して強烈なエゴイズムを隠し持っていることを忘れてはならない。「お前さへ仕合せになれるのなら」、他人はどうなつてもかまわないというエゴイズムがひそんでいるのである。母親は「お前さへ仕合せになれるのなら」と語っているのに、なぜか、父親の方には言葉がないという事実に注目すれば、そこに母不在のコンプレックスを終生もちつづけた芥川が母の愛を極限まで昇華させようとしていたこともみてとれよう。

このような芥川のインフェリオリティ・コンプレックスを背景とするとき、問題の前者、すなわち予想外の結末が秘める謎も解明されよう。子供としての愛、また母から反射された愛であるため、仙人にならなくても正直な暮しをしたいと言っており、これは人間らしい生活の中に誕生した愛だったと考えられる。だからこそ、読者は感動するのだ。それも理よりも情に価値をおく日本の読者にとってはそのようなのである。逃れることのできない人間愛を追求して人間の愛情の美しさに安定感を得ている。

このようにみえてくると、この芥川の童話がまさに愛のこもる、心やさしい物語だということがあらためて確認されよう。それも決して理に裏打ちされた愛では

19) 大原御幸(1954)『平家物語』中央公論社、p.239.

なく、いかにも情としての、無限抱擁としての愛の物語だということでもある。

#### IV. むすびに

『杜子春』は酷薄な世間の人々と対照される親の愛の真実、平凡な生活の中の本当の幸福といった倫理的、道徳的モチーフをどのように評価するかがこれまでの研究の主軸となってきた。この童話で芥川は自己の抑制された<知>の何を解放しようとしている。そこには童話の世界を現実から完全に切り離そうとする意識、それに宗教的世界への心情的共感を背景にして、現実に抑圧される<知>を解放しようとしたという芥川に共通する心性を見ることができる。本稿はコスモロジー(異界)の構造と杜子春の人間愛を通した<母の愛>について追究してみた。まとめてみると、以下のようなものである。

一つ目は、『杜子春』の焦点は杜子春と仙人(鉄冠子)に求められ、彼らの対話と行動が人間愛を創出していく過程を読み解いている。そのため、この小説に組み込まれるコスモロジーの構造を追究することから始めた。そのコスモロジーは仙界と地獄(六道世界)から成ることであった。小説のストーリーによると、杜子春は鉄冠子によって仙界に導かれていくことになる。やがて鉄冠子からタブーを課された杜子春は地獄を幻視させられる。魂は天上に上昇するのではなく地獄に下降し、そこにおいてもまず手始めに肉体的な呵責を受ける。そこでの厳しい苦行がいわゆる冥界訪問の話型と結びついて、いつのまにか地獄での苦行へと移行し、そこで畜生道へ堕ちていた父母を幻視するというものであった。

そのプロットは典拠の『杜子春伝』に拠るのではなく、日本の天神縁起の日蔵説話系の話型に拠ることを明らかにしている。そのストーリー内容が説話文学における異界訪問譚の話型を、おそらく芥川にとっては無意識的ながら、自己の童話の枠組としていた。そこには童話の世界を現実から完全に切り離そうとする意識、それに宗教的世界への心情的共感を背景にして、現実に抑圧される<知>を解放しようとしたという芥川に共通する心性を見ることができた。

二つ目は、杜子春の人間愛を通した〈母の愛〉についてさぐってみた。

その一、杜子春が地獄で幻視するのは獄卒に責め抜かれて苦痛を訴えながらも、母親の杜子春への無償の愛であった。また、見るに耐えらず、母親への愛ゆえに発してしまった杜子春の「お母さん」という一声であった。そこに芥川の秘められた〈母を呼ぶ真実の声〉を見いだしている。その根底に芥川の母親不在のコンプレックスを想定することができた。

その二、杜子春は極端に贅を尽くして没落を繰り返したからこそ、人間の欲望に支えられた金銭による人間関係の脆弱さや空虚さをはじめて実感した。そしてその結論として、杜子春は鉄冠子に弟子入りして仙人になろうと志した。しかし杜子春は仙人になろうと思う反面、まだこの段階では本当には現世の欲望を思い切ってははいない。仙人になって世間の人々と位相の異なる仙郷で生きたいと思う自らの願いと、母に声をかけたいという肉親への愛情との葛藤において母との愛の交感を選んだ。それは他人との関係によって決められる生を生きることよりも、肉親との愛の交感を保持しながら生きることを杜子春は選んだ。人間の情愛や欲望にこだわるからこそ真の他者を認識しようとはしない杜子春からする仙人との会話あるいは応答には本当の対話が成立することはなかったのはそのためであった。非人間化の道を歩もうとしていた杜子春の人間性回復への、いわば回心のきっかけを与えたのが〈母の愛〉だった。

その三、仙人の矛盾する言葉からくる杜子春のアポリアは、黙っていなければ仙人の術は得られず、黙っていれば殺されるということになる。そこには看過しえない二つの問題がひそんでいるのだが、その一つは、これまで見てきた仙人の矛盾する言葉であり、もう一つの問題は心根の優しい母親がどうして地獄の畜生道に堕ちたりしなければならぬのかということであった。それによって杜子春が陥ったアポリアであった。

その四、地獄の畜生道の問題は、母親は物語世界で犯した罪の報いというよりも、中世仏教の女人観によって畜生道に堕ちているということであった。そのことを、芥川が中国古典の題材に対して日本中世の文化伝統の継承として記述したと捉えた。芥川が中世の文学を愛していたことは彼の創作からうかがえるとなれば、そこから中世的女人観が畜生道と結びついていることは教養としてあ

たということも否定できまい。なぜ女人と畜生が結びついたのか。そこには女人觀の食欲を代入するとわかる。食欲とは近代語でいえば、まさにエゴイズムである。子供に対する自己犠牲の母性愛とってよかろう。この母性愛が第三者に対して強烈なエゴイズムを隠し持っていることを忘れてはならない。そこには母不在のコンプレックスを終生もちつづけた芥川が母の愛を極限まで昇華させようとしていたことがわかった。

このように、この童話で芥川は自己の抑制された<知>の何を解放しようとしていた。子供としての愛、また母から反射された愛であるため、仙人にならなくても正直な暮しをしたいと言っており、これは人間らしい生活の中に誕生した愛だった。『杜子春』はまさに愛のこもる、心やさしい物語だということがあらためて確認された。杜子春の人間愛を通して見た<母の愛>は、決して理に裏打ちされた愛ではなく、いかにも情としての、無限抱擁としての愛の物語だということであった。

### 참고문헌

- 浅井清外6人共編(2000) 『新研究資料現代日本文学第1巻』明治書院、pp.25-47.  
 海老井英次・宮坂覚共編(1990) 『作品論芥川龍之介』双文社、pp.43-78.  
 海老井英次編(1981) 『鑑賞日本現代文学第11巻芥川龍之介』角川書店、pp.124-153.  
 国文学解釈と教材の研究(1992) 第36巻11号臨時号 学灯社、pp.76-90.  
 国文学解釈と教材の研究(1981) 第26巻7号5月号 学灯社、pp.43-64.  
 後藤明生他(1991) 『群像日本の作家 芥川龍之介』小学館、pp.13-52.  
 日本文学研究資料刊行会編(1980) 『芥川龍之介 I』有精堂、pp.218-221.  
 平岡敏夫(1982) 『芥川龍之介』大修館書店、pp.178-190.  
 三好行雄(1993) 『芥川龍之介論』筑波書店、pp.96-117.  
 吉田精一編(1987) 『日本文学鑑賞辞典』東京堂出版、pp.247-251.  
 吉村稠・中谷克己共著(1981) 『芥川文芸の世界』明治書院、pp.21-32.

- ❖ 투고일 : 2012.06.30
- ❖ 심사일 : 2012.07.24
- ❖ 심사완료일 : 2012.08.06